
ロケットマン

sunshine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロケットマン

【Nコード】

N7448M

【作者名】

sunshine

【あらすじ】

工作好きの外山翔は、ある日クラスメイトの持ってきた「ロケット・グランプリ大会」をきっかけに、ロケット作りに専念するようになる。紹介してくれた中川雄二、幼馴染の石井沙紀、担任の阿部先生らの協力で、翔はだんだん成長していく。しかしそこにはいろんな壁があった。壁を乗り越える為に、もがき、苦しむ。そしてその先にある大切なものは手に入るのか。青春を描く感動物語。

（何かベタな感じになってしまいましたが、それなりに面白いはずです。ぜひ読んでみてください。）

1、挑戦の始まり（前書き）

熱心に物事に打ち込むのっていいですねー。そこを伝えてみたい
です。

1、挑戦の始まり

「えー、宇宙には我々がいる地球を含む太陽系があり・・・」

ただいま理科の授業中。外山翔は雑誌に教科書をかぶせてそれを読んでいた。理科は好きなんだけれど、どうもこの分野にはさっぱり興味が湧かないんだよな。だからいつも違う事をしている。周りを見渡してみる。授業をまともに受けていそうなやつらが半分で、内職したり、机の下でケータイをやっているやつらが半分、といった所か。さすがに同じ雑誌の2周目は退屈だった。もう一冊雑誌を買って置くべきだった・・・

長かった授業がようやく終わった。ちょうどこの授業が今日の最後だ。今授業をしていた阿部先生はこのクラスの担任でもある。阿部先生は職員室からプリントを持ってくるために一度教室から出て行った。皆がたわいもない話をし始める。うーん、帰ったら何をしようかな・・・

「おいっ」

突然後ろから肩をたたかれた。そこにいたのは中川雄二だった。

「何だよ」

「いや、さっき外山なんかの雑誌読んでたじゃん。」

「別にそんなのどうでもいいだろ」

「あれさ、何の工作？」

何だよ、中身まで見られてんのかよ。

「何でもいいだろ。おれの趣味だ。」

「本当にそれが趣味？」

は？いったい何が言いたいんだよ中川。

「そうやっておれの事を馬鹿にしているのか？」

「いやいや、そういうわけじゃなくって。もし真剣に工作が好きなら、ある提案があるんだけれど。」

提案？という事がさっぱりわからない。

ちょうどそのとき阿部先生が教室に戻ってきた。

「よし帰りのHR始めるぞー。みんな席につけー」

それを聞きしやがんでいた中川は立ち上がる。

「じゃあまた後で言うから。」そういつて自分の席に戻っていった。おれは引き出しの中に入っているノートや教科書をカバンの中に詰め込みながら不審に思った。はつきり言つて中川となんて面識はない。クラスの役員が一緒に、それくらいの会話しかした事がない。なのにあまりにも突然だろ。なんか変な事でもあるのか・・・。

そうこう考えているうちに、あつという間にHRは終わった。学級委員の掛け声とともにみんなが席を立ち、教室から出て行く。おれは座っていた。なんか動く気がしない。そうすると案の定中川がやってきた。

「さっきはごめん。で、話の続き。」

中川は持っていたカバンを机に置いて、何かを探し始めた。

「早速本題なんだけど。」そういいながら中川はカバンの中から一枚の紙を取り出した。

「ちよつとこれを見てくれない。今こういう大会が開催されているんだよね。」

渡された紙をしてみる。そこにはこう書かれていた。

「ロケット・グランプリ？」

「そう、自分の手作りのロケットを作つて、どこまで飛ばす事が出来るかを競うんだよ。」

へー、こんな大会があるのか。面白そうだ。

「なるほど。だけど何でおれを？」

「いや、実は・・・」中川が頭を掻く。

「おれあんまり器用じゃないんだよね。この大会には出てみたいんだけど。誰か作ってくれそうないかなあ、って思っていた

ら外山がいたわけだよ」

「おれまだ参加するなんていつてないぞ」

「まあそんなこというなよ。賞金とかもあるんだぜ。」

賞金はどうでも良かった。ただ興味はある。しかし・・・

「でも具体的に何すりゃいいとか知ってんの？」

「まあ大体は把握してるよ。だけどやっぱりロケットを作れるくらいの器用なやつじゃないと無理なんだよね。」

「じゃあいつたい中川はなにすんだよ」

「おれは設計図を作るよ。やっぱりそれも必要だろ。しかもそういうのおれ考えるの好きだし。」

確かに見るからにそういう事すきそうだな。中川の成績は学校でもトップを争えるほど優秀で、頭が良いのは明らかだった。

「でも、中川がそんな事やってる場合なのかよ。」

「中川が、って何だよ。おれだって何か学生のうちに思い出作っておきたいし。やっぱり何かに打ち込んだっていいじゃん。」

中川がそんなこと言うなんて・・・。

「まあ、考えるだけ考えてみるよ。」

そういつて中川から貰った紙をカバンにしまった。

「良い返事を待っているからな」

中川の声の背中を聞きながら、おれは教室を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7448m/>

ロケットマン

2010年11月5日17時34分発行